

“ 黒石市の地誌学的研究 ”

三 上 憲 義

1 はじめに

地理学の中で個々の地域についてそれらの自然と人文関係を調査して、その地域の特徴を知
ることを目的とする部門が地誌学であり、この地域の特徴つまり地域性をあきらかにすること
が地誌学的研究の目標である。

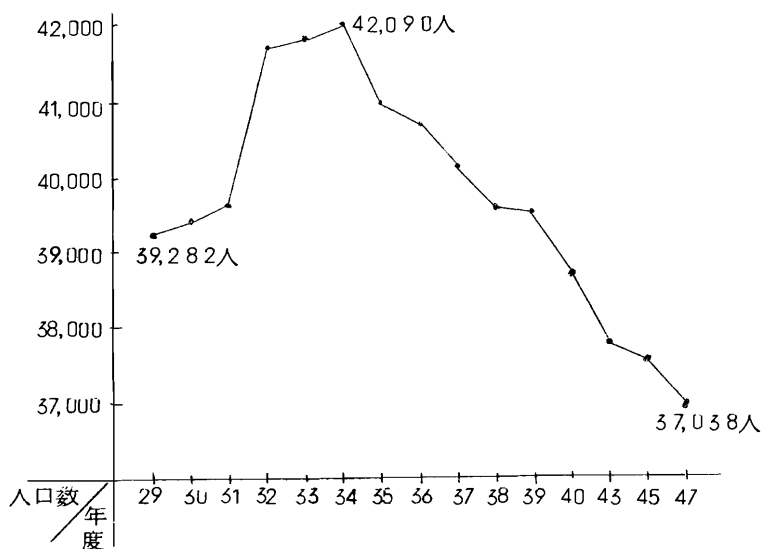
本論文は、黒石市を研究対象地域に選定し地誌学的研究により、黒石市の地域性をいくぶん
なりとも明確にしたいと考えるものである。具体的には、人口・商業・工業・農業を地域究明
の指標とし、これらを考察することにより、以下論文を進めることにする。

2 研究地域

黒石市は、黒石藩1万石の城下町として町の基礎が築かれ、明治22年町村制施行で黒石町
となり、近隣農村地域にかこまれた商業の町として南津軽郡の中心をなしていた。昭和29年
に黒石町・中郷村・山形村・六郷村・浅瀬石村の併合により県内では4番目の都市として市制
を施行、31年尾上町の一部を編入して現在に至る。市総面積(21632Km²)の8割が山岳
地域で山林・原野がしめ、丘陵地はりんご園、平坦部は水田地域になっている。市域面積中住
民の生活・生産活動の舞台は狭く、それも市西部地域に偏在している。

3 人口

第1図. 黒石市の人口推移



第1図に示した
ように市制施行当
時39,282人で
あった黒石市の人
口は、以後増加傾
向を示したが34
年の42,090人
をピークに、日本
経済が急激に高度
成長を示した35
年以降から急激に
人口が減少し、現
在も引き続き減少

を続けている。このように一貫して人口減少が続けている都市は県内では他にみられない。地域的には、中郷地区の市街地周辺地域で人口が増加しているのみで、黒石・六郷・山形・浅瀬石・追子野木の各地域はのきなみ人口減少が続けており、特に農業色の強い六郷・山形・浅瀬石の地域では、若年層の流出、出稼ぎ者も多く人口の過疎化地域となっている。本市では周辺地域の農業と、農業を基盤とした商業に依存する都市であるが、この農業・商業が不振で、工業もまだ非常にその地位が低い。そのため若年層の人々及び農業を離れる農家人口を十分第2・3次産業に転換させえず、おのずから人口流出を余儀なくされる現状である。

4商業

黒石市は黒石藩1万石の城下町として町の基礎ができ、明治以降も南津軽郡の中心として周辺農村地域住民の消費、即ち衣服・農具をはじめ各種の生産資材や生活必需品の需要に応じる商業の町として弘前と勢力を競うだけ商業の力は強かった。現在も商業への依存の度合が非常に強いが、第1表に示したように他市と比べ年々商業の地位が低下してきており購売額は最低、購売額の増加率も大きく県平均を下回っている。小売商店1店当りの販売額でも6927万円と県平均987.6万円を大きく下回っている。このことからわかるように本市商業界の停滞が目につく。これまで商店街・商店に対し接客・商品・値段・商店街施設に深刻な苦情が出されてきたにもかかわらず商店街の無関心、消費者に対する積極的な姿勢の欠如、消費者不在の営態度が依然支配的で、今なお零細な個人経営商店が多数を占めている。そのため消費者を引きつける力が乏しく近接する弘前に圧迫され、市東部は山岳地帯が続いていることもあり商圏拡大が思うにまかせず商業の不振が続いている。

第1表 商業の推移（県・他市との比較）（ ）構成比%

区 分	商 店 数		増 加 率	従 業 員 数		増 加 率	年間販売額(億円)		増 加 率
	43	45		43	45		43	45	
青森県	28212 (100)	30170 (100)	6.9	101828 (100)	111767 (100)	9.8	4374 (100)	5947 (100)	36.0
黒 石	951 (3.4)	958 (3.2)	0.7	2991 (2.9)	3097 (2.8)	3.5	97 (2.2)	114 (1.9)	17.5
青 森	5835 (18.9)	6164 (20.4)	15.5	25175 (24.7)	29172 (26.1)	15.9	1639 (3.7)	2094 (3.5)	27.8
弘 前	3855 (11.9)	3720 (12.3)	10.9	15541 (15.3)	17183 (15.3)	10.6	674 (15.4)	941 (15.8)	39.6
八 戸	4907 (17.4)	5120 (17.0)	4.3	20163 (19.8)	21009 (18.8)	10.4	895 (2.0)	1242 (2.0)	38.8
五 所 川 原	1017 (3.6)	1014 (3.5)	△0.3	4358 (4.3)	4649 (4.2)	6.7	176 (4.0)	243 (4.4)	38.1
十和田	980 (3.5)	1142 (3.8)	16.5	3364 (3.3)	4164 (3.7)	28.8	132 (3.0)	199 (3.3)	50.8
三 沢	953 (3.4)	962 (3.2)	0.9	3300 (3.2)	3090 (2.8)	△6.4	85 (1.9)	127 (2.1)	49.4
む つ	814 (2.9)	992 (3.3)	21.7	2583 (2.5)	3245 (2.9)	25.6	87 (2.0)	217 (3.6)	149.4

小売商店1店あたりの年間販売額 (万円)

	県平均	黒石	青森	弘前	八戸	五所川原	十和田	三沢	むつ
41	5163	4187	6936	7088	5729	7940	4965	5171	4800
	757.4	574.2	1033.2	1029.0	855.1	1183.7	900.1	712.7	666.0
45	987.6	692.7	1170.6	1192.1	1148.8	1783.5	1222.0	897.1	1086.6

5 工業

黒石の工業は商業に比べて地位が低く、工業の事業所は全事業所の7.1%を占めるにすぎず、年間出荷額も商品販売額の約 $\frac{1}{5}$ を占めるにすぎない。本市は農村地域にかこまれた商業の町として発展してきたところで従来から工業の占める地位は低く、古くから近隣農村地域から生産される農産物を加工する製造業が主体であり、現在もこの工業の性格は依然変わることなく持ち続けている。46年現在の工業の状態をみると、工場数は117で35年と比べ3工場の減少、45年からの1年間に4工場の減少、従業者数は1年間に78人減少し1468人となっている。出荷額は25億6281万円で35年と比べ約3倍の伸びをみせているにすぎない。117工場のうち従業者数19人以下という零細な小工場が100もあり、その中には1～3人という超零細な家内工業的性格を持つ工場が36もあり20人以上の工場は17を数えるにすぎない。業種別にみると、従来から本市の地場産業として大きなウェイトを占めていたリンゴ加工・酒造・味噌・醤油等の食料品工業と木材・木製品工業が圧倒的に多数を占め、ともに市内の消費者及び近隣農村の消費層を対象としたきわめて小規模な性質を持つものが支配的である。

6 農業

黒石の商業活動の基盤となるのは、やはり米とリンゴを中心とした農業であり、この農業の繁閑が商業活動に重大な影響を及ぼすわけである。ところが本市の農業状況をみると、第2表に示されているように、購売ナシ農家及び20万円未満農家の割合が弘前・五所川原と比べ高いということ、反対に100万円以上の農家の割合が圧倒的に小さい、ということからもわかるように経営規模の小さい零さい零細農家が多い。46年の総農家数3843戸のうち専業農家502戸(13.1%)、第1種兼業農家1741戸(45.3%)、第2種兼業農家1600戸(41.6%)で、近年とみに兼業化への指向を高めてきており、県内でも有数の出かせぎ地帯といわれるように出稼ぎ兼業で生計をたてる農家が多く、出稼ぎ者も激増している。農村地域からは、若い生産年齢層の流出も多く人口の過疎化が進行している。この農村地域の停滞が商業活動を沈滞させている一因にもなっている。

第2表 農産物販売金額別農家数 (46年)

	総農家数	販売ナシ	20万未満	20～50万	50～70万	70～100万	100万以上
黒石	3843 (100)	196 (51)	887 (231)	954 (248)	575 (150)	581 (151)	650 (169)
弘前	10085 (100)	438 (43)	1876 (187)	2221 (220)	1470 (146)	1550 (153)	2530 (251)
五所川原	4485 (100)	119 (27)	516 (115)	957 (213)	615 (137)	798 (178)	1480 (330)

() 構成比%

7. むすび

黒石は南黒地方の消費購買力特に周辺農村地域の経済力を基盤とした商業の中心地として、比較的安定した商圈を確保し、ゆるやかながら発展してきたが、最近商圈の斜陽化の色彩が強めている。それは商店街・商店に対して接客・商品・値段・商店街施設に深刻な苦情が出されてきたにもかかわらず、商店街の無関心、消費者に対する積極的姿勢の欠如、消費者不在の経営態度が依然存続しており、今なお零細な個人経営商店が多数を占め消費者を引きつける力に乏しい商業内容となっている。そのため近接する弘前市に圧迫され、市東部は山岳が続いていることもあり商圈の拡大が思うにまかせない。さらに本市商業の絶対的基盤である背後の農村地域は若い生産年齢層の流出及び県内有数の出稼ぎ地帯であり、出稼ぎ兼業で生計をたてるような零細な農業経営が支配的で生産性の低い農業地域になっている。この農業の沈滞が商業活動不振に拍車をかけている。また本市では工業の地位は非常に低く、今も従来と変らぬ零細な小規模工業依存の域を一步も抜け出していない。これら産業の不振で、非常に沈滞した地域となっている。この沈滞した地域を反映して現在も依然人口減少が続いており、若年層の流出、人口構成の老齢化及び出稼ぎの激増等の現象が顕著となっている。

最後に本論文作成にあたって助言・御指導下さいました横山先生に深く感謝致します。

参 考 文 献

- (1) 尾崎 四郎「郷土地誌提要」三省堂
- (2) 木内 信蔵「人口・集落地理学」新地理学講座5巻
- (3) 鳴海 静茂「黒石百年史」
- (4) 佐藤 静次郎「黒石地方史」
- (5) 青森県企画部統計課・商業統計調査結果書
- (6) 46年版統計資料「黒石の農業」、「黒石の商工業」